

仏領期ベトナムにおける規範的女性像の創出 ——ベトナム最初の女性誌『女界鐘』（1918年創刊）の 分析を通じて——

Creation of a Normative Female Image in the French Colonial Period in Vietnam: First Women's Magazine "Women's Bell" in Vietnam (published in 1918)

新井 悠子
ARAI Yuko

東京外国語大学大学院博士後期課程
Tokyo University of Foreign Studies, Doctoral Student

著者抄録

ベトナム初の女性誌『女界鐘』（1918年2月～7月）は、フランスの植民地期に登場した。創刊者はアンリ・ブラキエールで、実際の責任者はベトナム人のチャン・ヴァン・チムであった。『女界鐘』は植民地政府の女子教育政策を広める役割が期待されていた。確かに、政府の教育政策を称賛する記事が掲載されているが、ナショナリズム的要素も読み取れる。

本研究は、雑誌の記事分析から、『女界鐘』が示した女性像について考察したものである。『女界鐘』の執筆メンバーが提示した女性像は、前時代からの儒教規範である「三従」から逃れ、自ら行動する女性であった。ただ、そこで女性に期待されるのは、民族に貢献する母・妻となることであった。しかし、投稿記事には、執筆メンバーへ反論をし、『女界鐘』の女性規範から逃れようとする議論もみられた。

Summary

Vietnam's first women's magazine, "Women's Bell" (February-July 1918), appeared during the French colonial period. Henri Blaquière was its founder, while Tran Van Chim, a Vietnamese, was the actual person in charge. The magazine hoped to promote the colonial government's policy of educating girls. Although it contained articles praising the government's education policy, it had strong elements of nationalism.

This study examines the portrayal of women in "Women's Bell" based on an analysis of the magazine's articles. Women were presented by the writing members as acting on their own and escaping the Confucian norm of "Three Obedience", which had existed since the previous era. However, they were expected to be mothers and wives who would contribute to the nation. Nevertheless, there were arguments in some submitted articles, which refuted the writing members' portrayal and attempted to escape the female norm of "Women's Bell".

キーワード

女性雑誌 女性像 植民地期

Keywords

Women's magazine; female image; colonial period

原稿受理日：2023.1.22.

Quadrante, No.25 (2023), pp.151-173.

目次

はじめに

1. 20世紀初頭の女子教育観

1-1. 南部の女子教育状況

1-2. 植民地政府の女子教育観

1-3. ベトナム男性知識人の女子教育観

2. 『女界鐘』概要

3. 姉妹たちへの女性規範——『女界鐘』における主

要な論点

3-1. 『女界鐘』の良妻賢母論

3-2. 儒教道徳

4. 読者の反応

おわりに



はじめに

本稿の目的は、1918年にフランス人のアンリ・ブラキエール (Henri Blaquière) が創刊した、ベトナム初めての女性誌『女界鐘 (Nữ Giới chung)』の言説分析から、『女界鐘』が提示した女性像を考察するものである。

本論文で扱う『女界鐘』はフランス植民地期に創刊された。ベトナムは、19世紀後半からフランスの植民地化が進み、1884年に全土が植民地となった。植民地化のさなか、ベトナムの男性知識人を中心に激しい反仏抵抗運動が勃発した。20世紀初頭には抵抗の形式が変わり、知識人たちは「祖国の近代化のためには大衆への教育」をスローガンとして掲げた [Trần Đình Việt 1999: 102]。この時期の知識人は、ベトナム女性の地位を見直し、社会における女性の役割について検討し始めた。この時期の論者は主に男性知識人が中心であり、20世紀初頭の新聞・雑誌の読者も同じ知識を共有した男性であった。女性が女性に向かって自分たちの問題を論じ、そして流通するようになるには『女界鐘』の登場を待たなくてはならなかった。

『女界鐘』は、フランス植民地政府の言論政策の一環として登場した。つまり、女性たちの自発的な働きかけにより創刊された雑誌ではない。『女界鐘』が生まれた1918年とは、仏越提携下における教育制度形成期である。それゆえ、主な読み手となる女性の読者層が未成熟であったことなどの要因により、この雑誌は一年足らずで廃刊を迎えてしまう。その後、『女界鐘』に続く女性誌はすぐには生まれなかった。1927年に、女性論者たちによって女性誌の創刊を求める議論がなされ [Lại Nguyễn Ân 2019] [Phan Đăng Thanh, Trương Thị Hòa 2017: 223]、またベトナムの民族資本家による出版事業が盛り上がる時期とあいまって、1929年5月にサイゴンで『婦女新聞 (Phụ Nữ Tân

Văn)』、1930年12月ハノイで『婦女時談 (Phụ Nữ Thời Đàm)』、1932年7月にフエで『新進女性 (Phụ Nữ Tân Tiến)』と、主要な都市において女性誌が相次いで刊行する。

仏領期の女性誌は1918年に登場し、1920年代後半から最盛期を迎えるのだが、これまでの研究ではそれぞれの時期や雑誌ごとに、女性たちが何を論じたのか明らかになっていない。従来の仏領期の女性研究は、階級闘争・民族解放運動史に規定されており、仏領期の女性誌もまた、その観点から分析されてきたためである。ベトナムの階級闘争・民族解放運動史観における女性史の大筋は次の通りである。現在のベトナムの政権を握るベトナム共産党は1930年に結成された。結成当初から、党は女性の権利に対し関心を傾けており、党の指導のもと女性運動が盛り上がっていった [レ・ティ・ニャム・トゥエット 2010: 80-88]。ホー・チ・ミン率いるベトナム独立同盟主導のもと、1945年の8月革命によりベトナム民主共和国という共産党主導の国家が成立した。ベトナム共産党は民族の解放だけではなく、憲法において「男女同権」を宣言したことで、女性解放も成し遂げた [トゥエット 2010: 112]。この史観の代表的な研究はレ・ティ・ニャム・トゥエット [1975] やグエン・ティ・タップ [1980] である。これらの研究では闘争に直接関わった女性や、植民地主義や封建制から二重の抑圧を受けた女性たちの苦痛のありようにのみ焦点があてられ、仏領期創刊の女性誌については論じてこなかった。先の研究とは異なり、デイビッド・マー [1981] やショーン・マックヘイル [1995] は仏領期の女性誌を分析史料として扱っている。しかし彼らは、1945年を民族解放闘争・階級闘争による女性解放のひとつのゴールとして定め、その階級闘争的／女性解放的要素が読み取れる女性誌や記事を中心に論じている。マー [1981] は主に1910年代～1945年までの

期間に、クオックグー¹で書かれた新聞・雑誌上の女性をめぐる議論を概観している。なかでも、彼は1929年に創刊された『婦女新聞』の編集方針の変遷を追い、発行後期になると『婦女新聞』の書き手のなかに階級問題への視座があったと指摘する[Marr, G. David 1918: 220-226]。また、マックヘイル[1995]は、「男女同権」「女性解放」というキーワードをもとに『女界鐘』『婦女新聞』の比較を行っている。『女界鐘』は「女権」「男女同権」を掲げ、それぞれの用語を説明し、女子教育・知性やモラルの向上を目指していたが、あくまで仏越提携の体制のなかにとどまっていた[Shawn Mchale 1995: 192-193]。『婦女新聞』では「女性解放」を主張し、そのためには経済的基礎への攻撃をしなくてはならないとし、仏越提携をはねのけるような主張も見られたとする[Mchale 1995: 192-193]。マックヘイル[1995]は、マー[1981]が概略的にしか触れなかった『女界鐘』を分析している点は評価できる。しかし「男女同権」「女性解放」に焦点を絞っており、『女界鐘』が何をテーマにして論じようとしたのかその全体像が見えてこない。

では、植民地であった他の儒教文化圏の東アジア地域における初めての女性誌は、どのような論点で論じられているのだろうか。他の東アジアにおいては「新女性」²への関心が高く、「新女性」登場後に、彼女たちが創刊した女性誌を中心に上げてきた。近年では、その偏りへの問題意識から、朝鮮を対象に1920年代からの「新女性」登場以前からさかのぼって

論じて行こうという動きがある[Kim Jin Seouk 2005][李貞恩2014]。李貞恩[2014]は、開化派の男性により1898年に創刊された『独立新聞』と『帝国新聞』を女性に向かって啓蒙を呼びかける点で評価している。ふたつの新聞は、伝統的婚姻制度や男尊女卑に基づく女性観への指摘をなし、女性に近代的意識を注ごうとしたが、発行者が封建的思想に基づいた開化派儒学者であったため、封建的女性観を克服できなかったと指摘する[李貞恩2014: 72-75]。その後の1917年に「東京女子留学生親睦会」の機関紙として『女子界』が登場した³。この雑誌は、植民地に生きる女性たちの主体を読みとる史料として分析されている。『女子界』は、日本留学を通じて得た近代的知識に基づき、朝鮮人女性としての主体的な意識を有しながら、朝鮮社会の女性問題に取り組んだ[崔蕙隣2013: 199]。崔蕙隣[2013]は、1910年代の女子留学生は、朝鮮人女性であることを強く意識していたが、日本の女性解放運動に携わっていた日本人女性からは日本人である自覚が見られないと指摘する[崔蕙隣2013: 199]。その要因は、宗主国の女性は女性としての自分自身を問い詰めることができ、国家や民族の問題に目を向ける必要がなかったためだと分析している[崔蕙隣2013: 199]。

ベトナムの初めての女性誌である『女界鐘』は、朝鮮の『女子界』とは異なる条件のもと創刊された。1つは、『女子界』が留学先の日本で彼女たちの意思のもと創刊し出版していたのに対し、『女界鐘』はフランス植民地政府の

¹ ベトナム語を表記するローマ字体系である[川本邦衛2011: 1319]。

² 「新女性」の基本的な概念は「新教育を受けた女性」であるが、この「新教育」の教育水準はその地域によって異なる。朝鮮での「新女性」とは、朝鮮内および外国で近代的教育を受けた女性たちの意味であるが、具体的には、朝鮮内では女子高等普通学校・高等学校など中等程度の学校教育を受けた層を指す[井上和枝2013: 15]。台湾での「新女性」とは、纏足をやめ、日本教育を受けた女学生＝女子教育の学歴の所有者である。ここでは、高等女学校の在校生や卒業生を指す場合もあるが、小・公学校出身者も含まれることもあったことが指摘されている[洪郁如2001: 14]。

³ 朝鮮において、女性の手によって出された最初の雑誌は、1908年に慈善婦人会により発行された『慈善婦人雑誌』である。女性の天性である慈善の奨励と教育の奨励が二大目的であったとの言及はあるが[井上2013: 42]、それ以上の分析はなされていない。つまり、『女子界』とは実際には初めての女性誌ではないが、崔蕙隣は、朝鮮人女性が女性として自覚・自立を求め、自分の意見を集团的に表し、雑誌刊行と編集に携わった「最初の女性誌」とであると提示している[崔蕙隣2013: 199]。

言論政策のもと登場したという創刊の経緯である。さらに、学問的基礎も異なる。『女子界』の書き手は近代教育をうけた女性であったのに対し、『女界鐘』の主筆であるスオン・グエット・アイン (Sương Nguyệt Anh, 1864～1921 年) は幼い頃から父より漢文とチュノム⁴の教育が施されてきた。これらの条件のもと誕生した『女界鐘』の主な書き手である女性たちは、民族イデオロギーと女性自身の解放をどのように捉えていたのだろうか。本論文は、植民地政府による教育制度形成期に登場した『女界鐘』のなかで、女性たちが自分たち自身をどのように規定し、いかなる規範的な女性像を創出したのかを検討する。

1. 20世紀初頭の女子教育観

仏領期以前は、女性はいささか頃から「三従」「四徳」という儒教道徳のみを教えられるだけであり、学校へ通うことは公に認められていなかった。女子への教育機会が開かれていったのは、19世紀後半からである。このことは、女子教育を推進する植民地政府とベトナムの男性知識人が、従来の女性とは異なる新しい女性の創造を目指したことを意味している。南部で創刊した『女界鐘』が、いかなる状況の中で登場したものなのか把握するために、以下では、主に南部の女子教育の状況を概観する。

1-1. 南部の女子教育状況

1917年12月、当時のインドシナ総督であるアルベール・サロー (Albert Sarraut) により「学政総規 (Règlement général de l'Instruction

publique)」⁵が公布された。この「学政総規」は、各地でまちまちに進められていた教育制度を統一し、在インドシナのフランス人向けの学校とは別に、仏越学校を設け、「土着民」のための教育機関を規定した [岩月純一 1995: 13]。ここには女子教育に関する項目も盛り込まれている⁶。ただ公布以前からフランス当局は現地人向けの教育を開始している。

1862年のサイゴン条約によってベトナム南部はフランスの植民地直轄領となった。その条約締結の前年から、当局は教育機関の開設を始めている。1861年にはフランス人に仕える通訳者育成のため、アドラン学園 (Évêque d'Adran) を開校した。1864年には当時の総督であるグランディエール (Grandière) が従来の漢文を廃止し、クオックゲーと筆算を教えるための小学校を各省へ開校することを決めた [Ngô Minh Oanh 2011: 15]。1866年には南部には47校が開校している。その後、1871年には師範学校をサイゴンに開校し、1874年には官吏補佐育成のための学校を増設した [Oanh 2011: 15]。同時期に、植民地政府は教育に関する規定 (1874年規定・1879年規定) を公布し、就学年数と教育内容を定めた [Oanh 2011: 16]。これまでの研究では、先の学校機関にどれだけ女学生に対し入学許可が出ていたか記載がないが、女子の入学が正式に認められるようになるのは、教育制度が一定程度整えられた後の1880年であった。1880年に男子だけではなく、女子の入学が許可された公立の学校が開校した [Oanh 2011: 18]。私学は先んじて、1875年にはシャ

⁴ 前近代にベトナム語の口語を記述するのに用いられた漢字の仮借や漢字をもとに考案した会意や形声の民族文字である [川本 2011: 386]。

⁵ ポール・ボー (在任期間: 1902～1908年) の時期から、植民地の実情と伝統に根差した、現地住民のための公教育の審議会が設置されおり、この1917年の「学政総規」とはボーの構想を整備して発表したものである [近田政博 2005: 59]。

⁶ 現時点では2ヶ所の言及箇所を確認できている。1つ目は、「第2章 原住民用女子初等学校」である。そこでは、男子の初等学校 (6年生) を村に1校、女子は省に1校の女学校の設立し、設立できない場合は共学も認めるが男女の席は離すと定められている [古沢 2009: 284]。2つ目は女子の補足学校に関しては、コーチシナには「サイゴンの原住民女子コレージュ (collège des jeunes filles indigènes à Saigon)」があると記している [古沢 2011: 241]。

ルトル聖パウロ修道女会により、サイゴンに Sainte Enfance 校という女学校が開校していた。1886年には南部には7校の女学校が開校され、922名の女学生が在籍していた [Dang Thi Vang Chi 2015: 26]。女子の公立高等小学校開校へ、インドシナ政府が動き出すのは1915年以降である。南部には1915年サイゴンにアオティム校 (Trường Áo Tím)、1917年フエとハノイにドンカイン校 (Trường Đồng Khánh) が開校した。サイゴンのアオティム校は当初は初等部しかなく、入学者数も42名であったが、次第に生徒数が増加したため1922年までに中等部が開設され、新たな校舎も建設された [Nam Sơn Trần Văn Chi: 2021]。当時のアオティム校では、中等部は週に1～2回のベトナム語の授業以外は、教授言語はフランス語であり、カリキュラムは理系や文系の科目に加え、絵画、音楽、体育、女工⁷、家政、こどもの養育といった内容もあった [Thái Thị Ngọc Dư, Dominique Rolland, Nguyễn Thị Nhân, Bùi Trần Phương 2014: 8]。

ベトナム全域をみても、年々学校数や就学人口は増加傾向にあった。1939～1940年度的全課程の学生・生徒数が、全人口2,300万に対して約30万人(全人口の1.3%)を超えていたとするが、その8割以上が初級学校(3年制)の生徒であり、多くが初級学校で学業を終えており、その後の進学を望める生徒はほんの一握りであった [広木克行 1978: 152]。このフランスの植民地主義の教育は「人民の絶対的窮乏化とその人民をさらに収奪するための少数の下級官吏要請を目的とした教育制度」だったとの批判がある [広木 1978: 152]。つまり、ベトナム国内の階級格差の拡大を指摘している。さらに、男女の進学率を見ると、フランスの教

育政策により女子教育機関の拡充がなされ、女子は就学機会を得たが、男女の就学・就業機会の格差はいまだ大きかったということも指摘できるだろう。

1936～1937年度の初級学校数はベトナム全域で2,496校、生徒数は166,621名(男子135,396名、女子31,315名)であった [船越康寿 1998: 121]。また、中等教育へ進学する女子生徒数は、北部・南部・中部合わせて1921年では105名から1931年には343名へと増加しているが、同年の男子生徒数は4,496名であった [Trịnh Văn Thảo 2009: 163]。つまり、初級学校では男子4:女子1で、中等教育は男子13:女子1の比率であった。女子の卒業後の進路は、リセ(共学)への進学や、女子高等小学校の師範科を卒業し教師となる道もあったが、多くは家庭へと帰っていった⁸。

以上を踏まえると『女界鐘』創刊の1918年とは教育制度が整えられ、ベトナムの主要な都市に公立の女子高等小学校開校が始まった時期ではあった。しかし1918年の南部においては、後に中等部も開校されるアオティム校はまだ初等部しかない状況であり、私学を除き⁹、女子の就学とは初等教育(就学年数6年)までしか設定していない段階にあり、男子との教育格差は圧倒的なものであった。

1-2. 植民地政府の女子教育観

南部においては19世紀後半から始まった女子教育は、フランス植民地政府のいかなる女子教育観に基づき進められたのであろうか。当局がベトナムの女子教育に重点を置いていたことが、当時の総督であるアルベール・サローが執筆した1923年『フランス植民地の開発』からうかがえる。彼の女子教育の目的とは、植

⁷ 「女工」とは料理や裁縫といった女性の仕事を意味する [川本 2011: 1101]。

⁸ 1923年には医薬本科学校内に助産婦科が設置されたことから [小田なら 2022: 54]、医療も女性の分野として一部整えられる動きもあったと推測する。

⁹ 1918年に私立マリ・キュリー校 (Trường Marie Curie) も開校している。

民地体制下の近代化を肯定し、それを次世代に伝える母となる人物の養成と、フランス式の近代教育を受けた男性知識人にふさわしい結婚相手となる妻の創出であった。

母親というものはその社会的地位如何に関わりなく、どのような母親でもわが子に与える精神的絆の強さ、影響力の強さ、影響力の大きさという観点からしてほとんど絶対的な存在であることには疑いないであろう。子供に言葉を教えるのはまず母親である。同様にその民族社会での宗教や習俗、慣習、偏見にいたるまで母親から子供に教え伝えられる。(中略)われわれが企図したことを実行しようとするとき、つまり近代化のために何かをしようとするとき、それに抵抗するのは多くの場合、女性である。したがって、ことを成し遂げるためには女性の信頼を得る、われわれの企図について女性に理解してもらう、これが必要なのである[アルベール・サロー 2021: 212]。

彼の女子教育観には、母を通して子への同化を進めるための手段として講じる意図があった。別の箇所では、教育を受けた男子はいずれ、世間知らずの女性や何の助けにもならないような女性との結婚を嫌がるようになるとの記述もある[サロー 2021: 213-214]。つまり、女子教育とは近代教育を受けた一部のエリート男性にとって、ふさわしい結婚相手となる妻を用意しておくために講じられるのでもあった。

この女子教育の理念は教育現場にも反映されている。1926年、サイゴンのアオティム校の卒業式で卒業する女子に向けて、フランス人医師がスピーチをした内容は、学校で学んだ寛容さ、自己犠牲、慈善を、卒業後もさらに磨いていくことを求めることを、衛生、母乳育児、子

供の養育方法についてであった[Micheline R. Lessard 2002: 148]。つまり、植民地政府の女子教育は、女子に男子と同等の教育内容と就業機会を積極的には用意せず、大半の女学生には、植民地運営に母や妻として貢献する女性となることを期待していた。

1-3. ベトナム男性知識人の女子教育観

植民地期以前は、ベトナム男性知識人たちは就学から女子を締め出していた。20世紀初頭から、植民地体制派／反体制派のベトナム男性知識人どちらからも女子教育推進が唱えられるようになる。この20世紀初頭の知識人は、前の世代の反仏抵抗運動がことごとく失敗に終わるのを目の当たりにしていたため、旧套を打破する以外に民族の危難を回避する道はないと認識していた[白石昌也 1976: 560]。旧套のなかには、女子の無学も想定されており、女子にも教育の機会を与えることを主張する。論者はそれぞれ、民族や国家に対する女性の活動範囲について異なる点もあるが、彼らの女子教育の目的は、母・妻として民族に貢献する女性の創出である。以下からは、東アジアにおける良妻賢母論を概観した後に、20世紀初頭のベトナムの男性知識人の女子教育観についてみていく。

日本では「良妻賢母」、中国では「賢妻良母」、朝鮮では「賢母良妻」という用語が、日本においては明治維新後の1890年代から、中国や朝鮮においては1905年頃から使われ始めた[陳延媛 2006: 20]。各国は、西欧帝国主義の脅威にさらされるなかで、これまでの儒教的規範に基づく女性像ではなく、近代国家に貢献できる新たな女性像として「良妻賢母」を提示した。陳[2006]は、伝統的な女性規範と「良妻賢母」は、どちらの女性像も基本的には女性の活動は家庭のなかに限定されるが、それぞれの女性観が背景にする原理に相違があると指摘する

[陳 2006: 24]。儒教の性別分業論(男は外／女は内)は、陰陽五行説に基づく「男尊女卑」論により正当化されているが、「良妻賢母」論の背後には、近代人権思想に基づく男女平等観と近代ナショナリズムがある。つまり、国民である個人の役割はすべて平等に富強な国家建設に対する貢献に収斂されるという、人権思想と近代ナショナリズムのもとで、女性が「良妻賢母」として家庭の中で行う活動も男子が社会で行う生産活動と同等な価値をもつとみなされる[陳 2006: 25]。

クオックグーで書かれた新聞・雑誌において、最も早くから女子教育について論じたのはルオン・ズ・トゥック(本名 Lương Khắc Ninh 1862～1943年)である[Dang Thi Vang Chi 2015: 26]。当時トゥックは、自身が主筆を務めていた『農賈茗談(Nông Cổ Mĩn Đàm)』の1902年8月28日付の記事のなかで、「私は、政府に女子教育のための学校を建てるよう要求した。その時、南部の理事長官と意見が一致し、後に各省の組織に女学校設立を指示した」と述べ、女子教育の目的には「妻や母としての役割を上手く行えるように」するためと設定している[Dang Thi Vang Chi 2015: 26]。この記事からは、彼の女子教育観がうかがえる。

人がこの世に生まれる、男子も人であり、女子もまた人である。明らかなことは産んだ父母の苦勞の賜物である。9ヶ月間胎内におり、3年抱きかかえられて育つ。どうして男子が尊く、女子が動物なのであろうか[Lương Dũ Thúc 1902: 6]。

まずトゥックは男女が平等に「人間」とであると主張する。そのあと、これまでは男子のみに文字が教えられ、女子には縫物や料理しか教えられてこなかったことを批判し、女子教育を推奨する[Lương Dũ Thúc 1902: 6]。彼が想定す

る女子への教育とは、就学年齢7～12才の間に文章や筆算を学ぶことである。この学びにより女性自身が本を読み、将来こどもへと教えるべき礼儀を知り、話に出てくる守節や貴人をまねることができる[Chữ Búc 1902: 5]。さらに、結婚前や結婚後、夫の家に嫁いだ時には、商売の分野においても、帳簿をつけ経営状態を把握できるようになる[Chữ Búc 1902: 5]。彼の女子教育は、両親の助けとなる子供、結婚後は子供に礼儀を教える母、夫に対して守節であり商いの面でも貢献できる妻となるための教育である。

彼の女子教育論の根幹は、男女平等観に基づく良妻賢母的思想であった。しかしトゥックの女子教育論は、家族内秩序の維持に「利」となる／害とはならないという主張が全面に押し出されており、ここでは「国家」「民族」とのつながりで論じられてはいない。しかし、『農賈茗談』の創刊目的から考えると、彼が女子教育を推進した目的は、ベトナムの近代化へ貢献する女性の創造であったといえる。『農賈茗談』は1901年に南部の都市サイゴンで発行された雑誌であり、南部における初めての経済誌であった。トゥックは『農賈茗談』により人々に技術と商売を知らせ、大きな商業を起こすことが富民強国(dân phú quốc cường)にとって第一の手段だと考えていた[Trần Văn Nghĩa 2014: 52]。つまり、彼の関心はベトナム国内の産業分野の発展を通して、国と民を強く豊かにすることにあった。そのことを踏まえると、彼は女子教育推進によって、国家や民族繁栄のために、家庭内の母・妻の役割と、帳簿をつけるなどの補助的仕事ではあるが、産業分野にも役立つ女性の創造とを目指したと言える。

グエン・ヴァン・ヴィン(Nguyễn Văn Vĩnh 1882～1936年)は『登鼓叢報(Đăng Cổ Tùng Báo)』上で、ダオ・ティ・ロアン(Đào Thị Loan)という女性のペンネームを使い1907年5月

23日から「女性のことば」というコラムを連載していた¹⁰。ヴィンは、このコラムの初回で女子教育について論じている。彼は、女子が文字を学ぶと多情となり、男子へ手紙を書くようになると多くの男性が怖れていると述べる [Đào Thị Loan 2018: 18]。さらに、このような心配をするのは、妻には愚かであり、家訓による夫に仕えることを望んでいる才知がない男性であると批判する [Đào Thị Loan 2018: 18]。

男性が、妻の恋を恐れるのは、妻が心に抱くほかのだれよりも才知が自分にあると思っていないからである。妻の貞節を守りたいのであれば、どうすれば妻がだれよりも自分を尊重してくれるか考えなくてはならない。そうして初めて才知ある英雄となる [Đào Thị Loan 2018: 19]。

ここでのヴィンの女子教育の議論も、妻への教育を「貞節」とのつながりで論じており、女子教育は夫婦の秩序を乱すものではないと主張している。『登鼓叢報』は1907年に北部の都市ハノイで創刊し、この主筆であったのがヴィンであった。この雑誌は資本主義を追求するため、工業・商業分野の発展、科学や古い慣習を廃止して新しい学問へと進むことを主張し、フランス人植民者の「開化」政策を称賛する記事も載っていた [Hồng Chương 1987: 56]。確かにヴィンは親仏派知識人と称される場合もあるが、河野 [2020] は、ヴィンの態度はフランス文化へ迎合ではなく、ベトナムの近代化において貢献したと評価する [河野美奈子 2020: 33]。以上の点から、女性教育の狙いはベトナム民族の近代化に貢献する女性の出現であっ

たといえる。

民族的良妻賢母を明言できたのは、当時反仏運動を展開していたファン・ボイ・チャウ (Phan Bội Châu 1867～1940年) であった。チャウは、20世紀初頭の民族運動の指導者のひとりで、民族解放闘争において女性の積極的役割を称揚した最初の人物と位置づけられてきた [今井昭夫 1997: 66]。チャウは1905年から東遊運動¹¹を始め、日本に滞在中の1906年に『新ベトナム』を執筆した。何 [2017] は、この書籍からチャウが当時東アジアに広まりつつあった「良妻賢母」を理想としたことを読み取れると指摘する [何純慎 2017: 26]。

女子は賢母、才妻となる責任、工業や商業の責任、そして国民の手本となり、軍務を補助する責任がある。英雄の母がいなければ、決して英雄の男児は生まれず、英雄の妻がいなければ、決して英雄の夫を助けることができない。芸術と経済において、女子は無限の権利を持っている。教育を深く理解していなければ、愛を持って、私をすて、公のために、義に殉じて国家が富強となる事業を打ち立てることができない。国に愛国の婦女がいなければ、その国はついには人の奴隷になってしまう [Phan Bội Châu 1999: 445-446]。

チャウは、国家の富強を目指すうえで女性たち自身がその役割を深く理解するためにも、女子への教育が必要だと主張する。その役割とは、母や妻に加え、産業分野や軍事分野における活動も含まれている。ベトナム「国家」を明確に提示できたのは、彼が東遊運動により日本

¹⁰ 『登鼓叢報』におけるダオ・ティ・ロアンの「女性のことば」は原文を入手できていない。今回は、ダオ・ティ・ロアンの記事を集め、2018年にグエン・ティ・キム・ハン (Nguyễn Thị Kim Hằng) 編集により出版された『女性のことば (Nhờ Đàn Bà)』から引用した。

¹¹ 東遊運動とはベトナム人の日本留学運動であり、1905年に始まった。最盛時の学生数は100名とも200名とも言われている [白石昌也 1987: 111]。

の滞在中に執筆していることもあるだろう。

以上を概観すると、20世紀初頭からベトナムの男性知識人による女子教育推進が唱えられていた。論じ方に違いがあるが、植民地体制派／反体制派の女子教育推進の目的は、民族にとって貢献する母・妻を創出することであった。家庭内の役割以外にも、トゥックは産業分野、チャウは、産業分野のみならず軍事分野における役割も同時に論じている。これは、ベトナムに限定したことはない。白水[2004]は、良妻賢母思想を中国に紹介した梁啓超は、19世紀末に新しい女性像として国家のために「生産活動に従事する女性像」を提示しながら、一方で民族強化のために子供を産み育て教育を施すことができる「教養ある新しい女性像」を提示しており、それは女性に二重負担を強いるものだったと指摘する[白水紀子 2004: 138]。

以上の20世紀初頭の男性知識人の女子教育論には、男女平等観という近代思想が背景にあるが、女性への権利の拡大にむけて議論を発展させていくことはなかった。あくまでも、母・妻、そして労働者／兵士として、民族へ貢献する女性を生み出すことが第一義的に求められていたのである。

2.『女界鐘』概要

ベトナムにおける最初の女性誌である『女界鐘』は、ベトナムの南部の都市サイゴンで1918年2月1日から7月19日までに全22号が発行された(隔週での刊行)。毎号13～15頁程度の分量がある。2号と19号が欠号しているが、その他の号はマイクロフィルムで保管され日本国内でも閲覧できる。

『女界鐘』は、フランス植民地政府の言論政策の一環で登場した雑誌である。第一次大戦後、高唱されるようになった仏越提携のスローガンの下、総督であるサローは出版事業についても力を入れていた。雑誌などの刊行物に

より、「インドシナにおけるフランスの偉大な使命」についての思想を植え付け、特に知識人層に向けては新教育を宣伝し、「開化」させることを目的とした[Phan Đăng Thanh, Trương Thị Hòa 2017: 78]。この方針のもと『インドシナ雑誌(*Đông Dương Tạp Chí*)』『南風(*Nam Phong*)』『国民演壇(*Quốc Dân Diễn Đàn*)』『南中日報(*Nam Trung Nhật Báo*)』『大越雑誌(*Đại Việt Tạp Chí*)』などが出版され、そのなかのひとつが『女界鐘』である。これらの雑誌は、フランス人の統治制度と植民地政策を肯定することや、国への協力が求められ、また厳しい検閲も受けていた[Phan Đăng Thanh, Trương Thị Hòa 2017: 78]。

創刊の経緯については、『女界鐘』の創刊号に、アンリ・ブラキエールが女性誌の発行を申し出るとサローは女子教育に熱心であったため許可した、この雑誌は普通教育に少しは貢献できるだろうと記されている[Bồn Báo 1918a: 1]。当時のサローの手記のなかには、女子中学校設立当初は母親たちが娘を学校に通わせたがらなかったとあり[サロー 2021: 213]、生徒を集めることに苦戦していることがうかがえる。この状況に際し、フランス植民地政府は当時の女子教育普及のひとつの手立てとして『女界鐘』を捉えていた。実際『女界鐘』は、フランスは私たちを末の妹のように愛してくれ、女子が学ぶ学校を建設してくれたと記述している[Bồn Báo 1918 b: 2]。つまり、『女界鐘』編集部はフランス植民地政府が当時進めている女子教育政策への肯定的な態度を全面に打ち出している。

では、この『女界鐘』は植民地政府の厳しい検閲という出版条件のもと、いかなる女性像を提示したのだろうか。

『女界鐘』の創刊者は、フランス人のアンリ・ブラキエールであるが、実際の責任者は、チャン・ヴァン・チム(Trần Văn Chim)という男

性であった。というのも、アンリ・ブラキエールはサイゴンで出されていたフランス語新聞 (*La courrier saigonais*) の責任者であり、ドンナイ省でコーヒー農園も経営しており、『女界鐘』に携わる時間はほとんどなかったためだ [Tuòng Khanh 2018]。チャン・ヴァン・チムは『女界鐘』の財政面においても責任を負っており、雑誌の存続のため資金を投入していた [Tuòng Khanh 2018]。主筆は、スオン・グエット・アイン (Sương Nguyệt Anh) ¹² である。アインは、愛国詩人であるグエン・ディン・チュウ (Nguyễn Đình Chiểu) の娘であり、幼いころから父より漢文、チュノムを教えられてきた。彼女は詩が優れていると有名であった。彼女が主筆に選ばれたのは、アンリ・ブラキエールが南部で有名な家の出身であった彼女を招いたためである [Phan Đăng Thanh, Trương Thị Hòa 2017: 163]。その他、主要な執筆メンバーには、主に実用記事を担当したエル・アイ・キエウ (L. Ái-Kiều) やティエン・フオン (Thiên Hương)、女子教育などの論評記事を書いたチャン・ティ・ダオ (Trần Thị Đào) がおり、この3名は女性であったとされている。サイゴンでの発行ではあったが、北部の女性による記事も少なくなかった。北部の書き手にはグエン・ティ・ボン (Nguyễn Thị Bông) がおり、北部の雑誌である『南風』にも寄稿をしていた。ほかに、グエン・ティ・クイン (Nguyễn Thị Quỳnh)、グエン・ソン・キム (Nguyễn Song Kim) がいる [Mlle Nguyễn Thương Nam 1918: 7]。実際には、キムはグエン・マン・ボン (Nguyễn Mạnh Bông) という男性であり、女性のペンネームを名乗っていた [Mchale 1995: 183]。

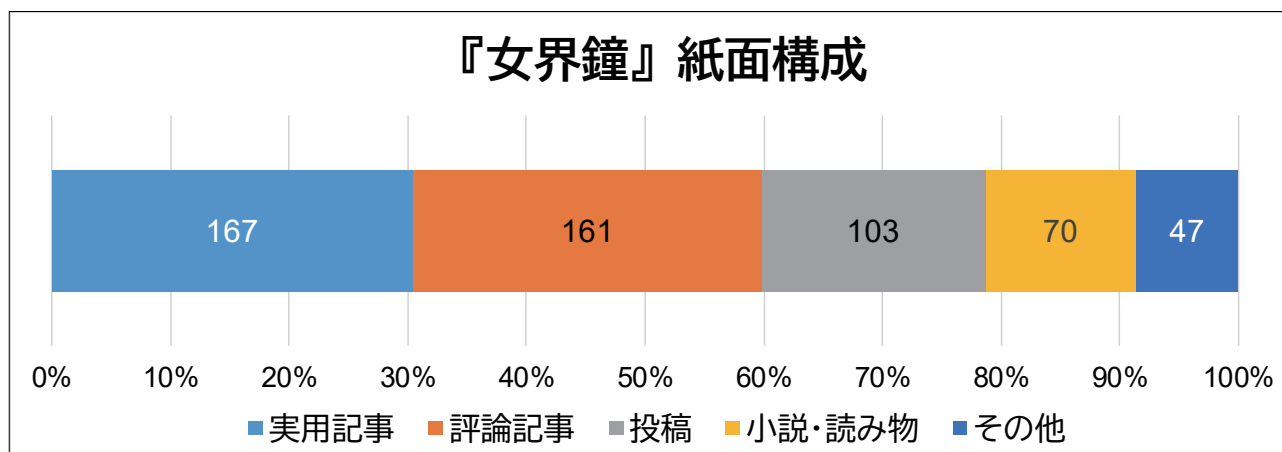
マー [1981] によると、出版事業に関わって

いたのは高等小学校相当の学歴を持った人々であったが、『女界鐘』の発行は新教育制度の形成時期であったため、主要な書き手は、新教育世代ではなく、幼いころから漢文による教育を受けてきた家庭の出身者であったのではないかと推測される¹³。つまり、『女界鐘』とは旧来の教育を受けていた女性が、読者である女性に向かって「姉妹たち (chị em)」と呼びかけ、論じる形式をとったメディアであった。ただ、実際には、書き手のなかに、女性のペンネームを使って書く男性も少なからずいたことも留意しなくてはならない。

『女界鐘』読者の属性について、読者の執筆記事から分析した限りでは次のようなことがわかる。投稿記事の約65%が女性、6%が男性、残りが氏名からは性別を判断できないものや、氏名の記載がないものである。既婚と未婚での面は多少、未婚女性が多かった。居住地を書いたものは多くないが、南部の都市以外にも、北部のハノイやナムディン、中部の都市フエや、プノンペンの回答も数件あった。読者が職業や所属先を書いたことはほとんどないが、女学生や女性教師と名乗る者もいた。以上を踏まえると、主な読み手は既婚者・未婚者を含めた女性であった。『女界鐘』はベトナム全土に流通していたとされるが [Tuòng Khanh 2018]、大半の読み手は南部におり、北部や中部の読者は一握りであったと推測される。『女界鐘』の購読料は1号あたり10スー (ひと月50スー、半年3ピアストル、1年は5ピアストル) である。1914年の鉦山での女性労働者の日給が20スーであり [トゥエット 2010: 52-53]、1号の金額が労働者の日当の半分にあたることから、購入者層はかなり限定的であった

¹² 1888年に父が死去した後は、家族でベトナム南部へ移住。結婚するも、夫が死去。こどもを育てながら、生活のために漢文を教える学校を開く。東遊運動に呼応して、一部家財を売り、日本へ留学する学生へ寄付した。

¹³ 書き手についての研究は進んでおらず、彼女たちの学習歴について明らかになっていない。しかし『女界鐘』の創刊期に、女子の中等教育機関が拡充され始めたため、主な書き手は近代教育ではなく、伝統的な漢文教育を受けたものと推測される。



【表1】『女界鐘』の紙面構成

といえる。

『女界鐘』は1年にも満たない期間で廃刊となった。これまでの研究では、当時はクオックゲーが読める女性が少なかったことや、また購読者の未払いが多かったことが挙げられてきた[Marr 1981:205]。それ以外にはどのような要因があったのか。印刷部数は1号につき4,000部で、4号、5号、6号は2,000部増刷して6,000部印刷予定であった[Tường Khanh 2018]。サイゴンで1929年に創刊した『婦女新聞』と比較すると、『婦女新聞』が全盛期において1号につき平均して8,500部であったことから、『女界鐘』の読み手が少なかった。また、『女界鐘』は発行地サイゴンでは販売代理店で直接購入できたが、それ以外の地域に住む読者へは郵便局を通しての販売であった[Tường Khanh 2018]。その際、郵便為替を用いて購読料の徴収をしていたが、編集部は何号にもわたって為替を送るように催促している。つまり読者は、購読方法を十分に理解していなかった。さらに、当時の編集部／印刷部の脆弱さも挙げられる。『女界鐘』は2号と19号が欠号している¹⁴。3号の冒頭には、2号は編集長であるチャン・ヴァン・チムが病気であったため、雑誌を完全に整えることができなかった

と記されている[B.B 1918: 1]。19号の欠号理由は不明であるが、13号にはチャン・ヴァン・チムが入院していることや、印刷所の人員が少なく雑誌の発行が遅れがちになっているため、編集部からの謝罪文が掲載されている[Nữ Giới Chung 1918a: 1]。つまり、編集長一人の病欠が刊行に大きな打撃を与えていることを見ると、当時の発行側の体制が十分に整っていなかったといえよう。

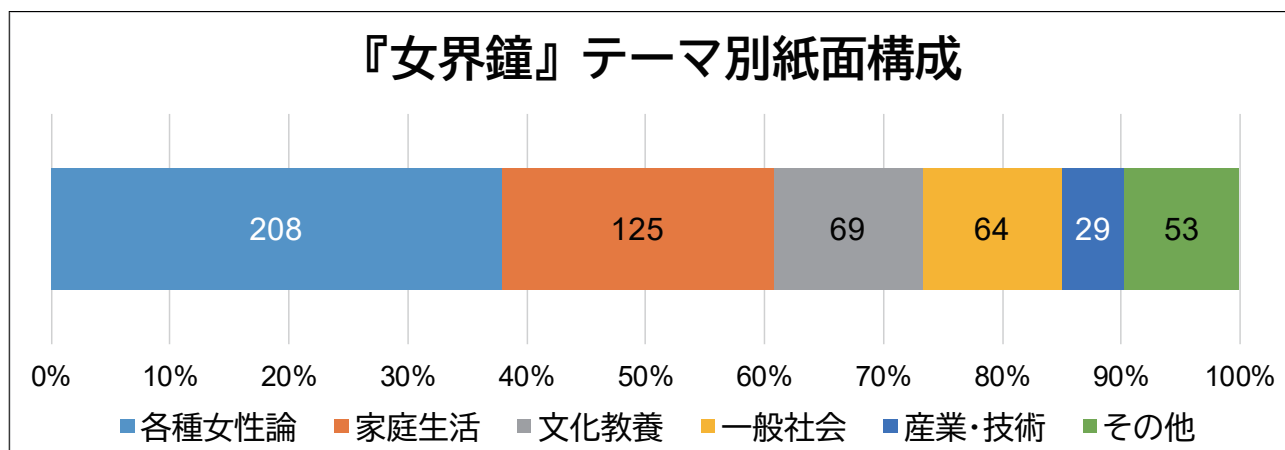
『女界鐘』構成の分析については、記事のカテゴリ分けをした紙面構成(表1)とその記事内容の構成(表2、次頁)から検討したい。

表1は、『女界鐘』各号の広告記事を除くすべての記事を「実用記事」「評論記事」「投稿」「小説・読み物」に分け、このジャンルに属さない記事を「その他」にカウントした¹⁵。最も多かったのは「実用記事」である。「実用記事」には、子供の養育方法、料理、掃除や家畜の育て方、家族間や外の人との交流の仕方などについての項目が毎回掲載されている。「投稿」とは、読者が送ってくる短い文章を示し、読者が特定のテーマについて論じた長文の文章は「評論記事」に集計している。

表2は、広告を除くすべての記事を「各種女性論」「家庭生活」「文化教養」「一般社会」「産

¹⁴ 史料保管の問題で実際には現存しており、入手できていないだけの可能性もある。

¹⁵ 木村涼子[2010]が行った大正期の日本の女性雑誌(『婦人公論』と『主婦之友』)、それぞれの雑誌の紙面構成・テーマ別紙面構成の分類を参考に行っている。



【表 2】『女界鐘』のテーマ別紙面構成

業・技術」というテーマごとに分類した表である。『女界鐘』は時事問題など「一般社会」への言及が少なく、「各種女性論」や子育て・家事など「家庭生活」が大半である。「各種女性論」については、次節で説明する。「文化教養」に属する記事は、小説が主であり、ほぼ毎号2本の小説が掲載されている。以上のことから、『女界鐘』とは、読者に女性を想定した、テーマ的な偏りがある総合誌であったといえる。

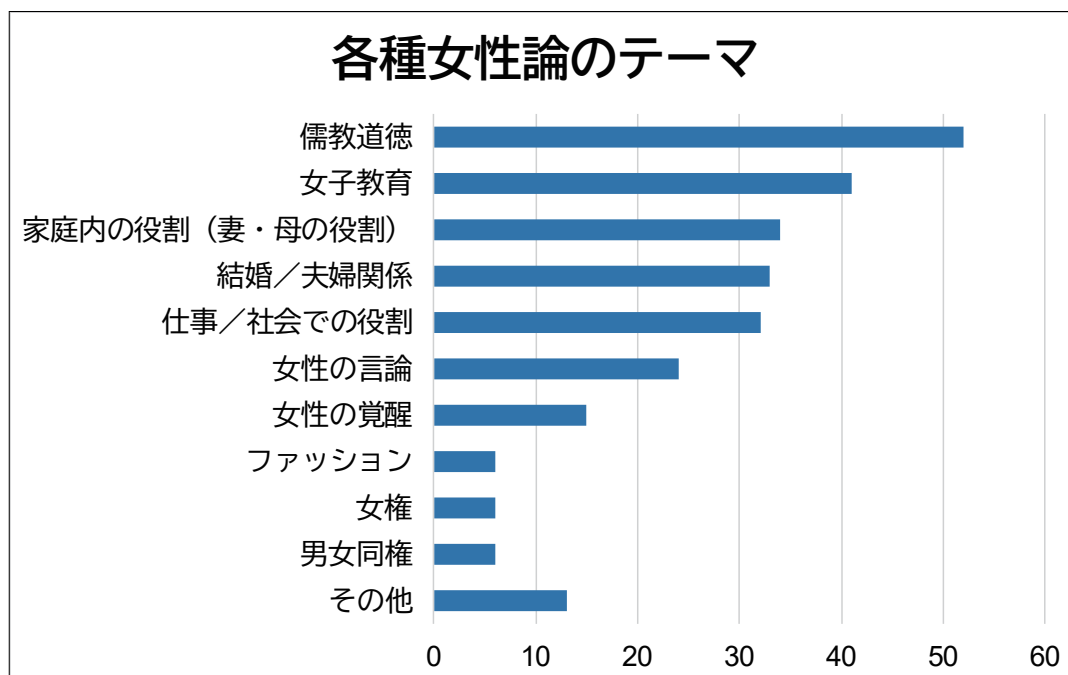
3. 姉妹たちへの女性規範——『女界鐘』における主要な論点

本節では、小説を除く「評論記事」、「投稿」、「読み物」のなかで「各種女性論」について論じている記事を対象に、それぞれが取り上げているテーマを分類した(次頁、表3)。本節では、この表3の「各種女性論」のテーマ分類表をもとに、『女界鐘』がいかなる女性規範を提示したのか検討したい。

女性論のテーマのなかでは、「儒教道德」が多い一方で、「男女同権」や「女権」などの近代思想が少ないため、『女界鐘』は伝統的な女性規範をそのまま提唱したと見えるかもしれない。確かにこれまでの研究でも、『女界鐘』が儒教や伝統的価値観の保持をしていたという見解が一般的である。デイビッド・マー[1981]は、『女界鐘』が「創刊の趣旨」で道德的規準を支えると宣言していることや、主筆のスオン・

グエット・アインは、伝統的価値の保持者としてとどまっていると指摘する[Marr 1981: 205]。また、マックヘイル[1995]は、『女界鐘』は女子の教育、平等という西洋の概念を受け入れ、男女間の平等をゴールとしながらも、儒教に基づく社会間のヒエラルキーを保持しており、男女が同じ職業に就くことを受け入れていないことから、書き手に矛盾があったと指摘する[Mchale 1995: 185]。このように『女界鐘』の儒教的側面が言及されてきたが、それ以上の分析はなされていない。

『女界鐘』の紙面をみると、主要メンバーからは儒教の徳目を取捨選択して、提示していこうとする意志が読み取れる。では、何を選び、何を淘汰しようとしたのだろうか。また、その選択の判断基準はいかなる原理に支えられたものののだろうか。結論を先に述べると、この儒教徳目の選択は、以下からみる良妻賢母論を支える男女平等観との兼ね合いのなかで選ばれている。そのため、『女界鐘』には前近代からの道德的規準をそのまま踏襲し、儒教に基づく社会間のヒエラルキーを保持する意思があるとはいえない。しかし、『女界鐘』の主要メンバーの議論は、20世紀初頭以降に登場した女子教育論の延長線上にあり、その範囲を超えることはなかった。



【表 3】 各種女性論のテーマ分類表

3-1. 『女界鐘』の良妻賢母論

『女界鐘』で「良妻賢母」「賢妻良母」「賢母良妻」など他の東アジア地域で見られるような四字熟語は見られないが、良妻賢母論は読み取れる。

『女界鐘』は、まず創刊の趣旨で、男性と女性では生まれながらに知恵と才能は異なるが、女子も社会に大きな責任を担っていると述べる [Bôn Báo 1918b: 1]。その社会の役割については、以下で示されている。

女子が人生を賢く巧みに生きるには、まず2つを身に付けるべきである。1つは「普通」2つ目は「実業」である。この「普通」とは富んでいても、貧しくても、聡明でも、愚かでも、だれもがある程度の学識をもつことである。「実業」とは女性や女子に不可欠で、誰もが手に仕事をもつことである。学識があって初めて妻、母の役割を理解できる。職業をもって初めて、夫や子の名声に頼ることをやめることができる。これは、家族のためだけではなく、社会全体の利益となる [Bôn Báo 1918 b: 2]。

社会に対して女性が学識をもち、妻や母として、また職業を通して役割を果たすことが社会への貢献へとつながると提唱されている。この時に「社会」というのは、フランス植民地当局への忖度が働き、「民族」や「祖国」などと明言できなかったのではないか。

また、創刊号の「女性の力」という記事では、女性は男性のような力がなく社会から承認されていないが、ナポレオンや孟子などの「山河を彩る人物」は「女性がいて初めて」登場できたと述べる [Sương Nguyệt Anh 1918a: 4]。ここでの女性の力とは、子供を産むことであり、この力は「造物主がすべての女性」に備えたものであり、この母としての役割を果たすことが社会へと貢献する道だと論ずる [Sương Nguyệt Anh 1918a: 4]。実用記事を中心に、子供への養育方法を提示する記事や、母と子供の会話を通じて、子供に科学的用語などを教える記事もある。ただ娘、妻、嫁の役割よりも、母の役割を第一義にとらえていたとは断定できないが、女性が子供を生み、育てることの社会的意義を唱え、その養育方法について改良していこうとす

る動きがあった。また『女界鐘』が想定した妻の役割とは、見識を広げ、夫のことを考え[S.N.A 1918: 7]、ときには支えとなることであった[S. Nguyệt Anh 1918: 1]。

以上を踏まえ、『女界鐘』は男女平等観と天職論に基づいた良妻賢母論を提示していることがわかる。男女平等観では、社会において女性も男性と同様に責任があることが論じられるが、その責任とはあくまでも性役割を果たすことであった。それゆえ、『女界鐘』の主な書き手は、男女同等の教育内容、就労機会の平等には懸念を示す。まさにそれが、男女平等観の立場の限界であった。主筆のアインは女子と男子それぞれに異なる教育目標を設定していた。アインは、男子には広く思いどおり行動する思想があるが、女子は同じ方針をもって良いのだろうかと問う[S.N.A 1918: 7]。女子に、父母が「四徳」を教え、女子もまた学ぶべきであるが、その目的は学識を積むためではなく、文字を学び、女性同士の連帯をすすめつつ、知見を広げ、仲間に対して助けとなる意見を提示するためだとする[S.N.A 1918: 7]。最後には、見識を広げずして、子に教えることも、本を読むことができないため自分の責任も知らず、夫の仕事がうまくいくように考えることもできないと述べる[S.N.A 1918: 7]。つまり、女子教育の目標とは、学識を積むためでも、職業への道につながるものではなく、基本的には母・妻として役割を全うするためであった。ただ新しいことは、文字を知り、女性同士の連帯を図ることを想定していた点である。

就労については、アインやチャン・ティ・ダオといった『女界鐘』創刊当初の主要メンバーは、女性が家族(両親、夫、子)や男子に依存して

いる状況から抜け出すよう主張する[Trần Thị Đào 1918b: 6-7] [Sương Nguyệt Anh 1918b: 1]。依存からの脱却の手段として職業を持つことを論ずるも、教師や刺繍の仕事といった限定的なものであった[Trần Thị Đào 1918b: 6-7]。アインは、欧米の女性たちが弁護士や医師になっていることを紹介するも、ベトナムの女性にとってはまず家事を完璧にすることが社会にとって利となると論じている[Sương Nguyệt Anh 1918b: 1]。

『女界鐘』の編集部は、当時の世界のフェミニズム運動の状況も把握はしており、「男女同権」「女権」についての用語を説明しているが消極的な態度であった。アインは、女権を主張するのは、ベトナムの女性の現状に合わないとする[Sương Nguyệt Anh 1918b: 2]。つまり、『女界鐘』の書き手は世界のフェミニズムを視野に入つつも、女性解放への道筋は想像できるものではなく、男女平等観に基づく良妻賢母像を提示し、儒教の徳目を選択的に提示する以上のことはできなかった。

3-2. 儒教道徳

もっとも論じられていたのは、「儒教道徳」である。なかでも、「貞節」「四徳」の言及が多かった。「四徳」とは女性が備えておくべき4つの徳(婦徳・婦言・婦容・婦功)である。この「四徳」に関しては、創刊号には『女界鐘』の目的の一つとして「女子たちが四徳を磨くことを少し手助けする」と挙げている[Bồn Báo 1918 b: 2]。ここで注意したいことは『女界鐘』の主筆であるスオン・グエット・アインや、初期から活躍する執筆メンバーであるチャン・ティ・ダオは、「三従」・「三綱五倫¹⁶」を否定はしないものの、「四

¹⁶ 三綱五倫とは、儒学は基本的な人間関係を君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友としてこれを五倫とよび、この関係を正しくすることが修養の目的であり、政治の中心課題としていた[末次玲子 2009: 10]。そして、五倫のなかでも、重要な君臣・父子・夫婦の関係を三綱とし、君・父・夫の絶対的権限を保証した[末次 2009: 10]。また、三従とは、女性の一生を三期に分けて従うべきものを示した教えであり、幼時は親に従い、嫁いだ後は夫に従い、老いたら子に従うことが示されている[川本 2011: 1447]。

徳」と同列に論じていない点である。

ダオは、徳がある家であっても「四徳」がなければ恥であると述べているも [Trần Thị Đào 1918a: 8]、この記事には「三従」への言及はない。さらに、生きているときは名声、利、非理、氏、三綱五倫について考えるが、死後はそれはどこにいくのかと問いかけ、人は個人の喜びではなく天下が幸福となることを考えるべきだと答える [Trần Thị Đào 1918b: 8-9]。またアインが、欧米では参政権を求める動きがあるが、それがいかにベトナムの現状にあっていないかを説明する際に、「三従」が登場する。天下について考えると、男子であっても政治とはどのようなものか問うている状況にあり、ましてや女子は「三従」以外の才能を持っていない [Sương Nguyệt Anh 1918b: 2]。ここでは、女子の無知さを示すために、「三従」しか知らないと表現されている。つまり、ダオやアインは「三従」「三綱五倫」について積極的に肯定すべきものとして掲げていない。むしろ、女性への儒教規範から取り除く方向へと進もうとしていたことがうかがえる。

「貞節」も繰り返し説かれている。なかでも、「伝記」という定期コラムのなかで頻出する。この「伝記」の欄については、以下のように紹介している。

今まで、徳行で才色のある賢母、孝嫁が山河を彩ってきたという列伝がある。しかし、その歴史は失われ、だれも覚えていない。まず我が国の才徳の女性を書き記し、功名を連ね、記念とし、紅裙の模範とするため、「伝記」に記す [Bồn Báo 1918: 4]。

この「伝記」は全14回掲載され、そのうち7回は「貞節」を守り称賛をされた女性の説話である。つまり賞賛すべき伝統的な女性像として、「貞節」なる女性を提示している。

「貞節」は「守節」と「殉節」とに分かれ、「守節」とは貞操を守って生きている未婚女性＝「貞女」と、夫が亡くなるが終生再婚をしない女性＝「節婦」が含まれている [魏則能 2008: 2]。また「殉節」は「貞節」を守るために自殺や他殺で亡くなる未婚女性＝「烈女」、既婚女性の場合＝「烈婦」が含まれている [魏則能 2008: 2]。『女界鐘』の「伝記」のなかでは、夫の死後(もしくは戦場での長期不在)に、再婚を勧められるも頑なに再婚を拒み続ける女性、つまり「節婦」が多く描かれている。ただ、この「貞節」の維持とは夫との関係だけではなく、家族との関係と深く結びついていた。

北部の読み手2名の女性が、「貞節」について評論記事を書いている。彼女たちは、ともに「守節は千金の価値がある」という記事のなかで、「貞節」が最も女性にとって重要であると主張している [Phạm Bạch Tuyết 1918: 6] [Nguyễn Thị Tàn 1918: 10-11]。グエン・ティ・タンは貞節を以下のように説明する。

こどもの務めとして、父母が取り決めた結婚を100年かけて節を守る。それが貞と孝であり、それゆえ貴なのである [Nguyễn Thị Tàn 1918: 10]。

つまり、ここでは「貞節」は夫との関係以外にも、その結婚を取りまとめた自分の両親との関係においても貴重なものと論ずる。この「貞節」が「千金の価値」になるためには、単に願っているだけはいけなさと主張する。タンは、未亡人になっても夫を祭りながら子供を育てる、または、粗野な夫であっても耐えるのは、尊敬するのに値すると論じる [Nguyễn Thị Tàn 1918: 10-11]。さらに、このような行動は、「三従」の義に基づいているという [Nguyễn Thị Tàn 1918: 11]。つまり、たとえ困難な状況であっても、女性は家族のために「貞節」を守るこ

とが推奨されている。このような議論は、『女界鐘』の主要メンバーであるアインやダオによるものではなかった。アインやダオが大々的に「貞節」を論じずにいたのは、彼女たちが「三従」を回避するなかで「貞節」をどのように扱うか、態度を決めることができなかったからではないだろうか。

以上のことから、『女界鐘』は、儒教の徳目を取捨選択して提示していた。「四徳」や「貞節」を繰り返し提示する意図は、儒教に基づく社会間のヒエラルキー＝「男尊女卑」を維持することにあるとはいえない。それは、「三綱五倫」や「三従」について否定はしなくとも明言はしないという姿勢に表れる。このような儒教による女性への抑圧を控えようとした点は、男女平等観とも大きくかかわる。つまり、女子も教育を受け、女性も男性と同等に社会の責任を負うことを自覚し、進んでその役割を果たす理念と、「三綱五倫」・「三従」は矛盾する¹⁷。

では、男女平等観に基づく良妻賢母論を提示しつつ、女性の道徳的規範として「四徳」や「貞節」を理想として示すことには、いかなる狙いがあるのか。そこには、植民地政府の教育が関わる。同化が進められるなかで、その言論政策のもと誕生した『女界鐘』は「民族」や「祖国」という用語をはっきりと打ち出さなかった。『女界鐘』にとって、儒教道徳をベトナムの固有の文化として位置づけ提示することが、ベトナムの民族性を示す手段であったのである。これは、『女界鐘』よりも先んじて、1917年に北部の都市ハノイで登場していた『南風』の流れをくむものであった。岩月[1995]は『南風』の特徴を、ベトナムの「国粹」の擁護を掲げ「固有の伝統」の模索を熱心に行なったこととする[岩月 1995:

3]。この「固有の伝統」のなかには、儒教的徳目も含まれており、栄えある「東洋文明」の一員としてのベトナムを構想し、これに西洋を対置し、そのうえで両者の調和にナショナル・アイデンティティを見出そうとしたのが『南風』である[岩月 1995: 4]。『女界鐘』が、読み手である姉妹たちに求めたのは、かたや近代思想の影響による男女平等観に基づく良妻賢母であり、もう片方には植民地政府により「開化」が進められても、ベトナム固有の文化である儒教規範を保持する女性となることであった。

『女界鐘』の主要な書き手の議論は、20世紀初頭の男性知識人の議論の範囲にとどまり、女性自身の解放へと発展しなかった。それは、南部の女子教育政策が低い水準にあったことや、自分たちの学問的基礎により女性解放への道筋を想像できなかっただけではない。それは、アインが同年代のファン・ボイ・チャウ主導の東遊運動の活動に土地を売り資金提供をしていたことからもうかがえるが[Bảo tàng Lịch sử quốc gia 2018]、民族に対して母・妻として貢献する女性が、主要メンバーの自分たちにとっても理想像であったのだ。

『女界鐘』のアインやダオは、「三従」や「三綱五倫」への言及を回避することで、儒教道徳における女性への抑圧性を弱めていく意思があったが、彼女たちの意思は貫かれることはなかった。当時のハノイで創刊していた『南風』の記事が『女界鐘』に掲載される例は、4号から見られる。ただその時はまだごく一部であった。10号にはグエン・ソン・キムによる「北部の手紙」が掲載される。ここでは『女界鐘』以外にも『南風』を読むことを勧めている。さらに、11号にはアインが北部の書き手であるグエン・

¹⁷ この「三従」への態度は、1917年に北部の都市ハノイで登場していた『南風』の主筆であったファム・クイン(Phạm Quỳnh 1892～1945年)とも通ずるものがある。クインは1917年4号『南風』に「女子教育」の記事を寄稿している。そのなかで、これまで女子に男性と同じように教育がなされてこなかった理由として、「陰陽、剛柔」を過度に信じすぎたことを挙げている。女子は「三従」により、自主的にはならず、男性を頼っていた、これからは女子への教育に関心を持つべきだと論じている[Phạm Quỳnh 1917: 2-3]。つまり、クインも女子教育を推進するにあたり、「三従」への消極的な態度を示している。

ティ・ボンに協力依頼をしている[Nguyễn Thị Bông 1918a: 8-9]。また、『女界鐘』13号からは『南風』の販売代行をしており、最終号の22号には『南風』購読希望者に向けて、これからは当時の主筆であったファム・クイン宛に手紙を送るよう、ハノイの住所を記載している[Nữ Giới Chung 1918b: 1]。

アインは創刊号から9号までの社説をほぼ毎回にわたって書いていたが、10号からは社説を書くことはなくなった。代わりに10号以降は、北部の書き手が中心となって社説を担当していく。まさに、この時期に、社説のなかで「三従」が「四徳」とならんで女性が守るべき徳目として提示されてしまう[Nguyễn Thị Bông 1918b: 1-2] [Nguyễn Song Kim 1918: 1-3]。このなかの一人であるグエン・ソン・キムは、初めて『女界鐘』に登場した時は自分を「女学生」として示しているが[Nữ sinh Nguyễn Song Kim 1918: 1]、実際にはグエン・マン・ボンという男性が執筆していた[Mchale 1995: 183]。彼は北部の『南風』の執筆メンバーであった。

このような儒教の徳目について当初の方針と逆行するような論者を引き入れてしまったことには、いかなる要因があったのだろうか。ひとつに南部において、女性誌の記事を執筆できる女性が少なかったこともある。また、当時の読者は投稿記事を見る限り女性が多いが、当時の女性の経済的状況からみると、実際には男性が購入しなくては『女界鐘』は女性の手元に届かない。そのため『女界鐘』の存続のためには、男性の意向を汲んだ編集方針をとらなくてはならなかったのではないか。

4. 読者の反応

『女界鐘』には、読者からの雑誌への感想や、主筆アインへの手紙なども掲載されている。その形式は、詩や、短い文章の場合もある。その

大半が女性誌の登場を祝うものである。それは、編集部側が意図的に選び『女界鐘』がいかに女性の支持を得ているかを宣伝する役割もあっただろうが、実際に女性に向けて作られた雑誌は初めてのことであり、それが南部、中部、北部の都市で読むことができたのは画期的な出来事であった。また、短い文章や詩の形式以外にも、まとまった文章が送られ、それが雑誌に掲載される事例もある。その場合、書き手は明確に読者であると記さない時もあるが、全号を通して数回程度しか名前が挙がってこないことを見ると読者であったと推定できる。

読者の意見のなかには少数だが、『女界鐘』編集部の議論とは異なる立場を表明するものも見受けられる。前節でみたように、編集部は良妻賢母論を提示しつつも、儒教的価値観の抑圧性を回避しようとする意志は読み取れるが、それを完全に否定することはできなかった。しかし、読者のなかには、より明確に女性の抑圧を摘発し、良妻賢母論へ抵抗する人々も登場しているのだ。

例えば、ある女学生は、自分たち女性は「世の中には英雄はいるが、英雌はいない。実際の私たちの責任は英雄を産むことで、社会的英雌を立ち上げるのではない」と嘆き、急いで進歩できるよう女子の模範を同胞に示してほしいと主張する[Liễu thị soạn 1918: 5-6]。創刊号で、主筆のスオン・グエット・アインは女性は英雄を産むことにより「山河を彩る」と論じた。この投稿記事は、アインへの返答になっており、書き手の女学生は、アインの主張はこれまでの女性の役割と同じにすぎず、そこからの脱却、さらなる進歩を求めている。

また儒教道徳による女性への抑圧性について、明確に記されることがある。投稿者のフオンは、『礼記』の「内則」により定められたとする、性別による誕生したときの儀礼の違いを取り上げ、女子が抑圧された状況であることを示

す。男子の時は左側に弓をつるし、女子の時
には布を右側につるす。弓矢は、四方に男子
が生まれたことを知らせる意味があり、布には
女子が幼い頃から、そして結婚後も家事のため
手を洗うのに十分な布が用意されているように
という意味が込められていた。フオンは、女子
が生まれた時は「謙讓」という意味があてられ
るが、それは女子の無駄な怒りを生んでいると
指摘し、学業を積むことにより女中のような文
字があてられる身分から抜け出すことができる
だろうかと論じている [Mlle Hườn 1918: 6-7]。
つまり、「内則」に基づく男女役割分業やその
女性観への否定が読み取れるのである。

フオン以外にも、女性の抑圧について言及
している読者がいる。リューはベトナム建国以
来、中国の倫理観の影響を受けたことを指摘す
る。「貞節」が『礼記』にあるが、それは女性を
軽視しており、女性に何も価値がないとはいわ
ないが、夫への操を失った女性はあざ笑われる
とし、女性が悠々していることを許していないの
ではないかと批判する [Mlle Liễu 1918: 7-8]。
また、「三綱」については、子は父に従い、妻は
夫に従い、妹や弟は兄に従うという、小さいも
のは大きいものへ従うことが家の和順となり、
それが国を安泰にするというが、この倫理観に
よって夫は権利を乱用し妻を従わせているの
ではと問題提起する [Mlle Liễu 1918: 6-7]。
以上のように、読者のなかには儒教による女性
への抑圧を批判する言説があった。しかし、こ
の意見は『女界鐘』の編集方針には反映され
ず、むしろ編集部側はそれと逆行するような立
場をとっていった。

このような女性の権利拡大に向けての動き
が、読み手のなかに登場する一方で、また別の
流れも登場している。それは、『女界鐘』の女
性規範を受け入れ、その枠組みのなかで「女
工」の技術をさらに高めていこうとする流れで
ある。『女界鐘』は、創刊号から「女工」に関す

る実用記事を一定のスペースを割いて紹介し
てきた。「女工」とは料理や裁縫といった女性
の仕事を意味し [川本 2011: 1101]、家政に
近い用語である。『女界鐘』の読者はこの「女
工」の技術習得のため熱心に実用記事を読ん
でいたことがうかがえる。

ある女性教師は、スオン・グエット・アインを
「私にとっての良き模範である」と全面的に肯
定し、幼い頃から「女工」について知っていた
が『女界鐘』を読み、新たに多くの料理を作れ
るようになったという。そして、男性が新聞を
買って女子に菓子作りを練習させようと提案す
る [Mademoiselle Aline Điện 1918: 6]。また、
役人の妻は、『女界鐘』により、妻や母としての
役割に役立つ知識を身に付けることを推奨し
ている [Mme Trần Quân Quòn 1918: 11-12]。
男性に対して、新聞を女性に見せ、昨日の出来
事について話し合い、女性は文章を書く練習
をし、料理や刺繍の練習をすることで賢くなっ
ていくとする [Mme Trần Quân Quòn 1918: 11-
12]。最後に『女界鐘』は女性だけではなく、
男性にとっても利となることを強調する [Mme
Trần Quân Quòn 1918: 12]。彼女たちは、良
妻賢母という枠組みのなかで、「女工」を進歩
させることにより、母・妻としての地位を自ら高
める意向があったのではないだろうか。

おわりに

『女界鐘』は、従来の研究では、儒教ヒエラル
キーを保持したと論じられてきた。しかし、『女
界鐘』の主な書き手には選択的に儒教の徳目
を提示する意思があった。それは20世紀初頭
から男性知識人が示してきた男女平等観に基
づく良妻賢母像を女性自身の理想として描き、
その観点から矛盾する「三従」を排除していこ
うとする動きであった。『女界鐘』が、儒教の抑
圧性を回避しながらも道德的基礎を儒教に求
めたのは、書き手の学問的基礎が儒教・漢文

にあったからだけではなく、フランスの教育による同化が進行するなかで、民族としての独自の文化を儒教道徳に求めたからではないだろうか。

朝鮮の『女子界』とは異なる条件のもと生まれた『女界鐘』は、『女子界』ほど明確に「民族」を提示していないが、儒教を民族の独自の文化と位置づけ保持することで民族イデオロギーを示した。つまり、『女界鐘』もまた、母・妻として民族の近代化に貢献することが第一義であり、女性の権利拡大に向けて議論が発展することはなかった。

ただ、読者の記事からは、次の10年へと繋がる新たな潮流が生まれたのも確かである。投稿者のなかには『女界鐘』や儒教による女性への抑圧を批判した者もいた。その後の1920年代後半に登場した女性誌には、良妻賢母像を維持しながらも、近代的職業についての欧米の女性を肯定的に紹介し、さらに家父長制による女性への抑圧を批判する動きもでてくる。つまり、1920年代後半の女性誌において大々的に取り扱われるようになるテーマを、『女界鐘』の投稿記事のなかに見出すことができるのだ。

また読者のなかには、『女界鐘』の規範的女性像に賛同し、「女工」をさらに発展させようとする動きもあった。1918年の時点では、読者それぞれが雑誌で知識を得て、生活の中で練習をするという動きでしかなかった。組織化されるのは1926年であった。この年に、中部の都市フエにて初めての女性団体である「女工学会」が結成された。会長にはダム・フオン女史が就任した。この会の目的は以下の通りである。

女工は、女性にとってあらゆる面で利となる。女性には、「自立」の精神や、暇を避けるほどに仕事を好む勤勉な性格が生まれる。女工は、女性の自立への道だけで

はなく、生計や、さらには将来の国家にとっては工芸の実業化の萌芽にもなる。今日期待することは、アメリカやヨーロッパの教化を少し享受している一部の姉妹たちのいい加減な点や、欠点を直し、女工を完全にし、好ましくすることである。これが、私たちの会の開設趣旨である [Đoàn Ánh Dương 2018: 24]。

ここでは、「女工」の技術向上により、女性たちを自立させることや、さらに国家の産業分野への貢献までも唱えられている。この会では、家政や進歩的書籍の学習会、演説会、養蚕・機織りなどの実習会が行われた [今井昭夫 1995: 3]。このように、組織化され、女性主導のもとで「女工」の発展や普及という活動基盤ができあがるのは1926年であったが、その前段階の女性たち自身が「女工」の意義や技術向上の意欲が芽生えたのは、1918年『女界鐘』までさかのぼることができる。

【参考文献】

【和文】

- アルベール・サロー, 小川了 (訳) 2021, 『植民地の偉大さと隷従』東京外国語大学出版会.
- 井上和枝, 2013, 『植民地朝鮮の新女性——「民族的賢母良妻」と「自己」のはざまで』明石書店.
- 今井昭夫, 1995, 『戦間期ベトナムにおける社会変容とジャーナリズム 1. 女性新聞・女性雑誌』東京外国語大学海外事情研究所.
- , 1997, 「フェ時代のファン・boy・チャウの思想」『東京外国語大学論集』54: 61-72
- 岩月純一, 1995, 「ベトナム語意識の形成と「漢字／漢文」～『南風雑誌』に見る～」『東南アジア——歴史と文化——』24: 3-24.
- 小田なら, 2021, 『〈伝統医学〉が創られるとき——ベトナム医療政策史』京都大学学術出版会.
- 何純慎, 2017, 「東遊運動期におけるファン・boy・チャウの女性論: 梁啓超との比較について」『比較文化研究』128: 23-35.
- 川本邦衛, 2011, 『詳解ベトナム語辞典』大修館書店.
- Kim Jin Seouk, 2005, 「近代女性論の形成と展開——日本と韓国の比較研究——」東北大学大学院国際文化研究科 17 年度博士論文.
- 木村涼子, 2010, 『〈主婦〉の誕生: 婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館.
- 魏則能, 2011, 「儒家文化の女性倫理について——貞節行為の原因分析を中心に」『多元文化』11: 1-14. (2022 年 7 月 8 日取得 <https://nagoya.repo.nii.ac.jp/records/12750#.YzOeb3ZBxD8>)
- 洪郁如, 2001, 『近代台湾女性史——日本の植民統治と「新女性」の誕生』勁草書房.
- 河野美奈子, 2020, 「グエン・ヴァン・ヴィンとフランス: インドシナにおけるベトナム人知識人による新聞出版をめぐる」『立教大学ランゲージセンター紀要』43: 25-34.
- 崔蕙隣, 2013, 「植民地近代女性の主体と民族意識——朝鮮人女子留学生と『女子界』を中心に——」『言語・地域文化研究』19: 189-203.
- 白石昌也, 1976, 「開明的知識人層の形成: 20 世紀初頭のベトナム」『東南アジア研究』12: 559-579.
- , 1987, 「東遊運動 (ベトナム) をめぐる日仏両当局の対応 (1)」『大阪外国語大学学報』73: 111-140.
- 白水紀子, 2004, 「中国における「近代家族」の形成——女性の国民化と二重役割の歴史」『横浜国立大学教育人間科学部紀要 II (人文科学)』6: 135-151.
- 末次玲子, 2009, 『20 世紀中国女性史』青木書店.
- 近田政博, 2005, 『近代ベトナム高等教育の政策史』加賀出版.
- 陳延媛, 2006, 『アジアの良妻賢母論: 創られた伝統』勁草書房.
- 広木克行, 1978, 「ベトナム教育改革史」アジア・アフリカ研究所『ベトナム〈上巻〉自然・歴史・文化』水曜社, 151-170.
- 船越康寿, 1998, 『南方文化圏と植民教育』大空社.

- 古沢常雄, 2011, 「日本におけるベトナム教育史研究の状況: フランス植民地教育史研究の視点から」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』8: 229-245.
- , 2009, 「フランス領インドシナにおける教育法制(1917年)」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』6: 259-294.
- 李貞恩, 2014, 「近代朝鮮における女性主体の形成過程——1890年代～1920年代印刷媒体に現れた女性言説を中心に——」一橋大学大学院言語社会研究科26年度博士論文.
- レ・ティ・ニャム・トゥエット, 片山須美子(訳), 2010, 『ベトナム女性史 フランス植民地時代からベトナム戦争まで』明石書店.

【英文】

- Dang Thi Vang Chi, 2015, “Education for Women and the New Woman in Colonial Vietnam,” *The Emergence and Heritage of Asian Women Intellectuals*, 11(1): 207-250.
- Marr, G. Daivid, 1981, *Vietnamese Tradition on Trial 1920-1945*. Berkeley: University of California Press.
- Micheline, R. Lessard, 2002, “Civilizing Women: French Colonial Perceptions of Vietnamese Womanhood and Motherhood,” Hunt, Tamara L. and Lessard, Micheline R eds., *Women and the Colonial Gaze*. London: Palgrave Macmillan, 148-161.
- Shawn, McHale, 1995, “Printing and Power: Vietnamese Debates over Women’s Place in Society 1918-1934,” K. W. Taylor and John K. Whitmore eds., *Essays into Vietnamese Pasts*, New York: Southeast Asia Program Publications at Cornell University, 173-194.

【越文】

- Bảo tàng Lịch sử quốc gia, 2018, “100 năm báo Nữ Giới Chung (1918-2018): Nữ chủ bút Trương Nguyệt Anh (Phần 1),” Bảo tàng Lịch sử Quốc gia, Hà Nội : Bộ Văn hóa, Thể thao và Du lịch, (Retrieved July 3, 2022, <https://baotanglichsu.vn/vi/Articles/3097/62101/100-nam-bao-nu-gioi-chung-1918-2018-nu-chu-but-suong-nguyet-anh-phan-1.html>)
- Đoàn Ánh Dương, 2018, “Đạm Phương Nữ sử với Vấn đề phụ nữ,” Đạm Phương nữ sử, *Đạm Phương Nữ Sử – Vấn Đề Phụ Nữ Ở Nước Ta*, Hà Nội: Nhà xuất bản phụ nữ, 7-36.
- Hồng Chương, 1987, *Tìm hiểu lịch sử báo chí Việt Nam*, Hà Nội: Nhà xuất bản sách giáo khoa Mác-Lê-Nin.
- Lại Nguyên Ân, 2019, “Bí ẩn về 'Đã Lan Nữ Sĩ' trên báo 'Tiếng dân' gần 100 năm trước,” Dân Việt, Hà Nội: LƯU QUANG ĐỊNH, (Retrieved December 10, 2021, <https://danviet.vn/bi-an-ve-da-lan-nu-si-tren-bao-tieng-dan-gan-100-nam-truoc-77771041417.htm>)
- Lê Thị Nhâm Thuyết, 1975, *Phụ nữ Việt Nam qua các thời đại*, Hà Nội: Nhà xuất bản khoa học xã hội.
- Nam Sơn Trần Văn Chi, 2021, “Trường Áo tím Sài Gòn ngày xưa,” Trí Thức VN, Vision Times,

(Retrieved May 13,2022, <https://trithucvn.org/van-hoa/truong-ao-tim-sai-gon-ngay-xua.html>)

Ngô Minh Oanh, 2011, “Sự du nhập giáo dục phương Tây vào Nam kỳ Việt Nam thời thuộc pháp,” *Tạp chí khoa học ĐHSP TP HCM*, 25: 13-23.

Nguyễn Thị Kim Hằng (Biên Tập), 2018, *Lời Người Man Di Hiện Đại - Nhời Đàn Bà*, Hà Nội: Nhà xuất bản Phụ Nữ.

Nguyễn Thị Tập, 1980, *Lịch sử phong trào phụ nữ Việt Nam*, Hà Nội: Nhà xuất bản Phụ Nữ.

Phan Bội Châu, 1999, *Phan Bội Châu toàn tập 2*, Huế: Nhà Xuất Bản Thuận Hóa và Trung Tâm Văn Hóa Ngôn Ngữ Đông Tây.

Phan Đăng Thanh, Trương Thị Hòa, 2017, *Lịch sử các chế độ báo chí ở Việt Nam trước cách mạng tháng tám 1945*, Hồ Chí Minh: Nhà xuất bản Tổng hợp Thành phố Hồ Chí Minh.

Thái Thị Ngọc Dư, Dominique Rolland, Nguyễn Thị Nhận, Bùi Trần Phương, 2014, “Trường học Pháp Việt trong thời kỳ 1920-1945 và sự hình thành tầng lớp nữ trí thức,” Trung tâm Nghiên cứu Giới và Xã hội - Đại học Hoa Sen & INALCO Paris.

(Retrieved July 5, 2022, <https://drive.google.com/file/d/1HLPHQGnUbpp0cYnnVyGi9vedPpSF1wqi/view>)

Trần Đình Việt, 1999, *Báo chí Việt Nam từ khởi thủy đến 1945*, Hồ Chí Minh: Nhà xuất bản thành phố Hồ Chí Minh.

Trần Văn Nghĩa, 2014, “tư tưởng trọng thương của Lương Khắc Ninh trên tờ Nông cổ mín đàm,” Nghiên cứu lịch sử, 6: 45-53.

Trịnh Văn Thảo, 2009, *Nhà trường Pháp ở Đông Dương*, Hà Nội: Nhà xuất bản tri thức.

Tường Khanh, 2018, “100 năm báo Nữ Giới Chung (1918-2018): Bàn về địa vị, vai trò của người phụ nữ,” Bảo tàng Lịch sử Quốc gia, Hà Nội : Bộ Văn hóa, Thể thao và Du lịch,

(Retrieved July 3,2022, <https://baotanglichsu.vn/vi/Articles/3097/68463/100-nam-bao-nu-gioi-chung-1918-2018-ban-ve-dia-vi-vai-tro-cua-nguoi-phu-nu.html>)

『農賈茗談』

Lương Dữ Thúc, 1902, “Huân nữ lưu,” *Nông cổ mín đàm*, số53: 6-7.

Chủ Bút, 1902, “Huân nữ lưu,” *Nông cổ mín đàm*, số55: 4-5.

『南風』

Phạm Quỳnh, 1917, “Sự giáo dục đàn bà con gái,” *Nam Phong*, số4: 1-10.

『女界鐘』

B.B, 1918, “Cần Khải,” *Nữ Giới Chung*, số3: 1.

Bồn Báo 1918a, “Xin nhớ” *Nữ Giới Chung*, số1: 1.

Bồn Báo, 1918b, “Lời tựa đầu,” *Nữ Giới Chung*, số1: 1-4.

- Liều thì Soạn, 1918, “Mừng báo Nữ giới chung,” *Nữ Giới Chung*, số3: 5-6.
- Mademoiselle Aline Điện, 1918, “Một lời phụ ích,” *Nữ Giới Chung*, số 8: 5-6.
- Mlle Hườn, 1918, “Sanh con gái,” *Nữ Giới Chung*, số 8: 6-7.
- Mlle Liễu, 1918, “Nữ quyền tự do luận nói về quyền con gái đàn bà,” *Nữ Giới Chung*, số 6: 7-8.
- Mlle Nguyễn Thương Nam, 1918, “Lời đòn bà bắc,” *Nữ Giới Chung*, số10: 6-7.
- Mme Trần Quân Quờn, 1918, “Bon! Bon!! Bon!!!,” *Nữ Giới Chung*, số 5: 11-12.
- Nguyễn Song Kim, 1918, “Đạo đàn bà II,” *Nữ Giới Chung*, số18: 1-2.
- Nguyễn Thị Bồng, 1918a, “Lời đàn bà Bắc,” *Nữ Giới Chung*, số11: 8-9.
- , 1918b, “Đạo đàn bà I,” *Nữ Giới Chung*, số17: 1-2.
- Nguyễn Thị Tần, 1918, “Chữ trình đáng giá ngàn vàng,” *Nữ Giới Chung*, số16: 11-12.
- Nữ Giới Chung, 1918a, “Cần Khải,” *Nữ Giới Chung*, số 13: 1.
- , 1918b, “Cần cáo,” *Nữ Giới Chung*, số22: 1.
- Nữ sanh Nguyễn Song Kim, 1918, “Bàn về lòng bác ái,” *Nữ Giới Chung*, số 11: 1.
- Phạm Bạch Tuyết, 1918, “Chữ trình đáng giá ngàn vàng,” *Nữ Giới Chung*, số20: 6.
- S.N.A, 1918, “Thương nhau xin nhớ,” *Nữ Giới Chung*, số 4: 7.
- S. Nguyệt Anh, 1918, “Nghĩa tiện tăng,” *Nữ Giới Chung*, số 5: 1.
- Sương Nguyệt Anh, 1918a, “Thê lực người đàn bà,” *Nữ Giới Chung*, số1: 4.
- , 1918b, “Nam nữ bình quyền là gì,” *Nữ Giới Chung*, số3: 3.
- Trần Thị Đào, 1918a, “Tiếng chuông Nữ giới,” *Nữ Giới Chung*, số1: 8.
- , 1918b, “Trách Nhiệm người đàn bà,” *Nữ Giới Chung*, số3: 6-7.
- , 1918c, “Nhàn sự xin ai nên ghe mắt,” *Nữ Giới Chung*, số22: 8.